

<資料紹介>

『靈交』にあとがきを記す。(9)

——香川県大島の療養所をあらわす点描——

「『靈交』にあとがきを記す。」(1)『彦根論叢』第378号(2009年5月)掲載

同(2)『彦根論叢』第379号(同年7月)掲載

同(3)『彦根論叢』第380号(同年9月)掲載

同(4)『滋賀大学経済学部研究年報』第16巻(同年11月)掲載

同(5)『彦根論叢』第384号(2010年夏号6月)掲載

同(6)『彦根論叢』第385号(同年秋号9月)掲載

同(7)『滋賀大学経済学部研究年報』第17巻(同年11月)掲載

同(8)滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.150(2011年7月)

阿部 安成

続穂波の猛筆 1939年も穂波の猛筆は健在で、いっそうその勢いをましてゆく観すらあった。前回とおなじくその執筆ぶりをあげておこう。第242号「**新天新地／何をやるか？**／おろがむこと／大丈夫だ／善化せん」(長田穂波、5段)「**療の元朝**」(穂波生、1段)「**随筆**」(穂波坊、4段)「**うた／即吟**」(穂波坊、6行)「**報告欄**」(穂波生、半段)「**浄財**」(おさだ生、半段)。第243号「**元日の感話**」(長田穂波、1段)「**聖書研究余録**」(ほなみ生、4段)「**詩歌／いのり**」(穂波坊、3行)「**随筆／修養団早天行事／オー日本よ／間違へなよ**」(長田穂波、3段)、第244号「**集会感話大略**」(ほなみ生、2段)「**何事も神の前にある／おみやげ**」(穂波生、1段)「**聖書研究余録**」(長田穂波、4段)「**随筆**」(ほなみ生、2段)「**うた／即吟四首**」(ホナミ生、5行)「**真理は自由を得さすべし**」(*、1段)、第245号「**葬別席上にて**」(穂波生、2段)「**随筆**」(ほなみ生、3段)「**復活節**」(穂波生、2段)「**会史(聖歌番号略)**」(*、1段)「**聖旨はひどく**」(ホナミ、9行)、第246号「**病床夜話**」(長

田穂波、5段)「随筆」(穂波生、3段)「うた」(穂波生、3行)「葬送席上感話」(穂波生、2段)、第247号「天業とは何ぞや?」(穂波生、1段)「尊皇愛国の真髓」(長田穂波、4段)「病床夜話」(ほなみ生、4段)「方舟の動物」(ホナミ生、1段)「うた／無題」(ほなみ生、6行)「うた／小詩」(穂波生、9行)「春はうれしや」(ほなみ生、1段)、第248号「愚となる勿れ」(穂波生、1段)「母のおもは神の愛」(ホナミ生、3段)「関また関」(ほなみ生、1段)「噫天沼兄逝く」(*、1段)「歌壇」(穂波生、10行)「病床夜話」(ほなみ生、3段)「雨中の百合」(ほなみ生、半段)、第249号「信仰によれる調和／神の国／天に報ひあり／聖別すべし／死後の国あり」(ほなみ生、5段)「新版のお知らせ」(*、1段)「うた／一杯の冷水」(ほなみ生、5行)「納涼台」(をさだ生、2.5段)、第250号「祈は力なり」(*、1段)「残暑」(穂波生、6段)「詩」(ほなみ生、1段)「病床夜話」(穂波生、2段)「残されたる天地」(ほなみ生、1段)、第251号「具体的信仰」(穂波生、1段)「鼻先説教／根より咲け／祈り心」(おさだ生、4段)「興亜奉公日」(穂波生、2段)「うた／恵雨」(ほなみ生、半段)「涙の底／神は愛なり」(穂波生、2段)、第252号「恵に恵を加へらるべし／聖書に還れ／信じて進べし／見ざる処、知らざる処／大島に霊交会あり」(*、5段)「神の証明」(*、2段)「祈禱と瞑想／目的に向つて進むなり」(*、2段)、第253号「瞑想」(*、5段)「反省」(*、4段)——これに毎号の巻頭言「セ、ラギ」と巻末の「編輯後記」がくわわる達者なペンである(*は執筆者の署名がないが穂波によるとおもわれる稿に付した)。

穂波の書 穂波のペンの成果は『霊交』にだけでなく、島外の刊行物にも収載されていた。たとえば、「現在は「現代宗教詩人叢書」への原稿を集録中であります」(「編輯後記」R:242_39)の1文がそれを報せる。前年1938年発行の『霊交』第234号に、『現代宗教詩鑑賞』発行の記事が載っていた。1938年3月発行の同書の著者は長谷部俊一郎。彼は1936年7月創刊の『きりすと教詩歌』(のちに『基督教詩歌』)という逐次刊行物の編集と発行を担っている¹⁾。長谷部がのち1941年に逐次刊行物『基督教家庭新聞』(第34巻

¹⁾阿部安成「同人穂波—『基督教詩歌』誌上の長田穂波」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.143、2011年1月)を参照。

第12号)に寄稿した「現代宗教詩の鑑賞」第3回において、穂波の詩がとりあげられることとなる。いまのところ「現代宗教詩人叢書」にかかわる書誌情報は、国立国会図書館が所蔵する『足跡』という図書の著者が長谷部であること、出版者は羊門社、出版年が1939年、羊門文庫の第14「現代宗教詩人叢書」、とわかるのみである(同書未見)。

長谷部が主宰するきりすと教詩歌社の同人でもあった穂波は、この1939年の年頭に、やがて刊行されることとなる図書に転載する詩を選別していたということだろうか。前年1938年刊行の『穂波実相』(日曜世界社)につづいて、このとき、穂波の作品があらためて編みなおされようとしていた。だが、『霊交』第249号紙上に掲載された「新版のお知らせ」の1冊にとりあげられた、長谷部俊一郎『詩集 足跡』(羊門社)には「現代宗教詩人叢書ノ一」との添え書きがある。『足跡』は長谷部単独の詩集なのだろう。長谷部が「現代宗教詩人叢書」と題するシリーズを予定したものの、穂波単独の、あるいは穂波をふくめた複数の著者による作品集は、刊行にまでいたらなかったというところだろう。

「編輯後記」には、穂波のペンによる稿だけでなく、彼が購入したり読んだりする書籍についてもときに記されている。『霊交』第245号のそこには、「先に求めた「聖書大辞典」と共」に、「「基督教百科大事典」を求める事が出来たので大感謝」とみえる。霊交会教会堂図書室には、『聖書大辞典』(馬場嘉市編、日曜世界社、1935年再版、初版1934年)があり、いくらか書名が違うものの、『基督教大辞典』(高木壬太郎、警醒社書店、1911年)がある。後者は「編輯後記」に記されたそれとは異なるのだろう。「聖書大辞典」「基督教百科大事典」は「共に嬉しい座右の友」と穂波はよろこぶ。

いまでも霊交会教会堂図書室に残る大量の図書は、その多くが穂波によって確かに読まれていた。さきの『聖書大辞典』にも穂波の筆跡とおもわれる多くの文字が、赤いインクで記されている。読者でもあり管理者でもあったであろう穂波は、創立以来の霊交会の歴史をふりかえるなかで、「書物は図書にほとんど一杯、神学書あり哲学書あり文学書あり、殊に有名な伝記類は好考の読みものであります、其他にキリスト教雑誌が毎月三十余种御寄贈を頂いて」と記していた(「恵に恵を加へらるべし」R:252_39)。図書については、おそらく、穂波のころとくらべてもそう多くが散逸してはいないとおもうが、雑誌(逐次

刊行物)は30タイトル以上も残ってはいない²⁾。どこかの時点で廃棄されたのだろうか、あるいは、雑誌は保存すべきものとの扱いをうけていなかったのかもしれない。

時局とキリスト 盛んにペンをふるう穂波は、戦時下の時勢とキリストの「救ひ」や信仰とを論じてゆく。特定の語を太ゴチックとする紙面の印字法は、第225号(1937年8月)にまでさかのぼるが、このころはそれが「キリスト」にのみかぎられるようになる。穂波は、信仰と国防と祖国浄化と興亜と、そして祖国への愛を説くことがみずからに課した使命であるかのように『靈交』の原稿を書いてゆく。

ここで、「尊皇愛国の真髓」と題された穂波の論稿をみよう(R:247_39)。冒頭で、「いまや日本国民は「聖書」を座右に備へて社会百般について、又人生問題について深く検討すべき時局に直面して居ると思ふ」と、現時局においてこそ聖書を読むべきだとの勧めがある。この稿が説くところは、「新東亜建設とは大陸に且て試た事なき皇道を示す所以である。万邦監視の中に平和の大使命を負ふて立つのである。この崇高な使命をして美果を結ばしめねばならない……こゝに我らの祈りが燃えて止まないのである」と時局と信仰を確認して、「真に日本を愛する者は聖書の精神に確立して何処までも日本をして……神の栄光の輝きの一つに迄向上に押し進め……なくてはならないと思ふ。この生命に確立してこそ如何なる苦難の下にも耐えて前進なし得ると信ず」と唱えることである。キリスト教信徒の戦時下における1つの生きる構えが示されている。

この稿が掲載された号の「編輯後記」は、「結局は永遠の世界での報ひを望みて、地上生活を簡易より簡易化して行くべきである。即ち、美食して不平言ふよりも、水を飲んで感謝するはよろしき哉！」と掲げている。「永遠の世界での報ひを望」もうと指し示したり、さきの引用のとおり時世時勢にみあった信仰を説くことのゆえに、だから宗教は療養所での治安や馴致に活用されたのだ、と判断するための材料にされてしまうだろう。

だがそれは、性急な結論であって、現実の事態は当然のこともっと複雑に展開している。前掲「尊皇愛国の真髓」には、

²⁾ いま図書室に残っている逐次刊行物については、阿部安成、石居人也「無教会と愛汗一大島青松園キリスト教靈交会の2つの精神」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.121、2009年12月)を参照。

よく国家が迫害すればとて、是を憎むべきではなく、愛と真を以て尽すべきである。妥協ではない、恐怖ではない、神に活ける者の真理の爲めである。／国家を愛する真のためである、故に万一国家が不法を行ふ時は……いかん？

との問いが提示され、それへの応答がつぎの1連の文章となる。

国家が狂へる場合はキリスト者は或は邪魔になるであらう、彼らは世と共に狂ひ、時代と共に乱舞する事は出来ない故である。／こゝに神を信じて居る者は、生活に於て悩み多いのである。

——この穂波の懐疑または躊躇は、1940年代の療養所をめぐって、きちんと記録されるべき療養者の意思である。一瞬、忠臣による諫言ともいうべき祖国愛のはたらきが述べられ、そのような気配がありながらも、それが生活における悩みにおきかえられてしまったのである。時局と信仰という論点は、よりいっそうていねいに論じられなくてはならない³⁾。

「歐洲の空に砲声が起つた」第二次世界大戦勃発ののちの11月号紙面で、穂波は「編輯後記」(R:252_39)に、国家批判ととられかねない「神国」への疑義を記すこととなる。

宗教と文芸 あらためてきちんと、癩予防法体制下の療養所における宗教について、また、その療養所内で書くことの意味について考えることが必要だ。第243号の「編輯後記」では、「癩者のために社会の開門してゐられるのは、宗教門と文芸門とであります」との1文がみえる。つづいて、

これは有難いことであると同時に大なる誘惑でも有ります。／やゝもすると無い物を有る如く見せ度がる故であります。／文芸も又、懸賞と名誉とを兼ね得んとの野心一杯に走る故であります。

という。ともすると無を有にみせたがる——これが宗教だけにかかるのかどうか曖昧な記述だが、わたしは宗教と文芸の双方にかかると思おう。これはなかなかおもしろいとらえ方だ。社会は癩者に宗教と文芸とを開いているが、どちらも「大なる誘惑」だ、なぜなら、ともに虚を實とするから、と説いている。穂波はこの提起を継いで、第250号の「編輯後

³⁾ この論点をめぐる1つの議論を、阿部安成「癩と時局と書きものを—香川県大島の1940年代を軸とする」(黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010年)で試みた。

記」で、「病者の生活が宗教と文学とのみでなく、何か発明の方へ伸び上れないものかと思
考いたしますので、奨励の道を開いて見たいと祈つて居ります」とみせていた（そこで、
「亀の子たわし」に学ぶべきだというところが、いまとなつてはよくわからないが）。

信仰と執筆の意味や意義が、ここにあらためて問われていたのだった。

修養団活動 穂波の「随筆」で「修養団早天行事」と題された稿がある（R:243_39）。

「長期建設」と言ふ国策」を支え進めようとの主張が、「先づ私共は自分自身を浄化いた
しまして、自己建設をいたす事が第一条件でありますとの自覚をともなつて唱えられて
いる。修養団に固有の標語である、「総親和」「総努力」「愛汗」の語がここにみえる。こ
うした修養団の活動がどのていどおこなわれていたのか、その詳細はよくわからない。

1939年8月発行の第249号「編輯後記」には、「高橋昭道先生御来島、修養団支部の生
みと育ての親とて感慨無量でした」と記録されている。このとき穂波は、初めての体験を
した——「実に意外にもトーキーを作る機械を初めて見物し、然も穂波を入れるのだとの
事に面喰つて終つた」というのだ。ここで穂波は「恐縮」と「困惑」を感じる。前者は、
「穂波でなければ」との言」で、「修養団七巻の内に自分も這入りました、どんな姿か声
か珍品でありませう」という。

短い記事ながら、穂波は修養団によるフィルム作成のための撮影をうけたということの
ようだ。このときの夜に「既製二巻の上映」があり、それが「蓮沼先生と平沼主相と伊独
満の大使と、恐れ多いが〇〇宮殿下御一方、其他は単独映写されて居ません」と知つた穂
波は、「屹驚して」、ついで「穂波、汝何者なれば斯る尊き人々の間に交り得るや」との「自
責」もみせたのだった。修養団創設者のひとりである蓮沼門三やこのころの総理大臣平沼
騏一郎、そして〇〇宮殿下などと同様に単独で映る穂波のフィルムは、どこかに残ってい
るのだろうか。

夏のフトコロ これまでもみてきたとおり、今回の号でも穂波の夏好きがよくあらわれ
ている。春になり「暖くなつたので、身体が自由が甚だよくなつた」穂波にとって「春は
嬉しい」のだ（ほなみ生「春はうれしや」R:247_39）。「青葉の自然はよい、社会とか人生
とかを思ふ心を棄て、初夏のフトコロに入ると何と清々する事か、神への祈りが自から湧

き溢れて来る」とちかづく夏に、穂波はからだまるごとでよろこびをあらわす（「編輯後記」同前）。「残暑」と題した稿を載せた9月発行の第250号「編輯後記」においても、この年の「から梅雨の後をうけて立秋の今日まで雨を見ない〔中略〕カンカンと勇ましく早りつづけてゐる」ときでも、「我れ夏を愛す」との謳歌を隠さない。

9月には「久し振の雨」があり、それもまた「嬉しかった」と穂波はよろこぶ。「これで残暑が柔らぐであらう」と期待をみせるようでありながらも、彼にとっては「暑い内は可成食事がとれたが、涼しくなるとスツカリ食欲が減退する」とまわりに告げると、「君はマルデ皆と反対だなア」と笑われるという（「編輯後記」R:251_39）。「我れ夏を愛す」穂波の躍如だ。

他方で、穂波は「冬は閉口だ」と嘆く（「編輯後記」R:243）。このとき、「足傷に少しく発熱したと思つたら親指が面白くない、思ひ切つて切断と決定」した（1月24日）。「切断した個処の出血が気になるが、集會に登丘する、歩行の調子が甚だ変である、何だか今にも倒れ相に感じる」ほどとなるが（1月25日）、「発熱は下坂となる。切断した跡は淋しいものだ、建物を崩した屋敷地を見る感がする」といえるくらいには回復した（1月26日）。

おなじ「編輯後記」でも、「冬はマヒした体には苦手である」との苦痛をくりかえしうったえる穂波はこのとき、「近頃は原稿を認めると夜が眠れないやうになつ」ていたため、「誰か交代して貰はぬと身体が編輯に耐えなくなり相である」との弱気もみせる。

第238号（1938年9月）の「編輯後記」から続号において、「サヤウナラ」「サヨウナラ」「サヨナラ」の挨拶がくりかえされるようになる。同欄での「左様なら」の初出は、おそらく、第216号（1936年11月）なのだが、第220号、第223号、とあいだのあいだいた同欄での別れの挨拶がこのころから頻出してくると、それが穂波の弱音に聞こえてしまう。

故郷と母 「方舟の動物」と題した稿で穂波は、なぜか、その冒頭に「私の育つたのは阿波の吉野川の辺りでありました」と自分の履歴をあらわす1文をおいている。故郷の川にいまでは「立派な堤防」ができていると聞き、子どものころにみた「泥海」のようになる吉野川の「猛威」を想いおこし、そして「ノアの話を偲」んだそうなのだ（R:247）。貧

乏で、ひとも離れる村ではあれ、「何歳になつても故郷は恋しいものだ」と告げるとき、「噫、お母さんは生きてみられるか」との思慕もあわせてペンを走らせる（「編輯後記」R:252）。そのすぐあとに、穂波の名が新聞記事となって「社会に頭れだすと、肉親の者は皆音信不通になつて終つた」と明かして、「淋しい淋しい想ひ」を隠さずに剥きだしにするものであつても、母を慕わずにはいられないのだ。

これを穂波の動揺や狼狽、不安定なところのあらわれ、というと、彼を見誤るだろうか。この「編輯後記」にはさきにふれたとおり、神国批判ともいうべき懐疑が示されていた。

(2011年7月31日、記)

~~~~

### 穂波生「報告欄」『靈交』第242号、1939年1月10日

「一、金六拾錢也、長野、北牧処女会様／一、金六拾錢也、埼玉、北沢ふみ江様／一、金六拾五錢也、神奈川、小塚みね様／一、金壹円也、神奈川、堤薫一様／一、金壹円也、平塚、佐藤安弘様／一、金六拾錢也、愛媛、松岡貞蔵様／一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金貳円也、兵庫、名和金次郎様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金六拾錢也、徳島、木内時子様／右、誌代及御寄附として有難く頂きました。／尚、本編輯終了以後に頂いた方は、次号にまわす事と致します。これで一先づ、十三年度の感謝欄は終りと致します。厚く御礼申し上げます。／特に十三年度内に於きまして、此の報告欄に記しません方々より、多大の御祈のこもつた金銭及物品の御寄附なり、委託がありました。御意思を尊重いたし、発表を差しひかへましたが、凡て祈りつゝ間違ひなく納めさして戴き、且つソレゾレ用ひさして頂きました故、此処に附記して御礼申し上げます。／穂波生」

### \*「編輯後記」同前

「○新年お芽出度う御座ゐます。恵みの年を送り、又恵みの年を迎へさして頂きました、有難いことでございます。今年も聖旨のまゝに生きぬきませう！／キリスト信者に悪い日がない、悪い月がない、だから悪い年はありません。本当にお芽出たうと祝ふべきであります……皆さん、お芽出たう御座ゐます。／○目下の皇国は「長期建設」の第一歩を踏み出しました、本年も国策の線に添ひまして「年賀状」は差上げません。本欄を以ちまして

御挨拶申し上げます。／去年は御深愛の数々を頂きまして、有難うございました……新しき年も御加禱下さいまして、ウンと御用の器として活かしていただき度いと存じます。／〇「穂波実相」は各方面の方々より、大変に喜んで頂きまして、種々なる御栄光を仰がされて居ります。中には自殺の瀬戸ぎは……今一步……と言ふ処で、穂波実相を得て踏み止まり、更に踏み返して……死に身になつて生きぬく……大覚悟を得られた青年が起つたなどは大々感謝であります。／〇現在は「現代宗教詩人叢書」への原稿を集録中であります、出版書店に対してはお気の毒であります、穂波一流のものしか出来ません、然し集録した詩の一篇が、且ては神の栄光の器に用ひられた歴史付きである点に於て、辛棒して頂きますし、また私自身としても感謝記録となり得るのであります。／〇伊予の橘さんが且て……内村先生にしても、穂波にしても、沢山著作して荷物が多くて、天国の狭い門にひつかゝりはせぬか……こんなやうな御手紙を送られた事がありました。橘さんの心持ちは別として、私は……最大の忠告……と思はれて、常に頭の内で繰返してゐます。／誠に文章の立派か拙劣かよりも、天国の用器たるか否かこそ大切と存じます。／〇本誌に致しましても、天国の役に立たぬやうな出版は致し度くありません／一千部の只一部が御使命にかなへば有難いのであります。一ケ年に一万二千部発行すると致しまして、只一人の霊を真剣に神への新生に導き得ますれば、国家のため、社会のため、天国のため、一万一千九百九十九部が捨つるとも、誠に安い事であります。今年も唯一人の救ひを祈つて発送いたしませう。／〇編輯二十周年記念にと思つて、金六拾銭也の白梅を一鉢もとめました、蕾が七、八ツついて居ります。見る処は大変にイタメつけられて居るやうですから、うまくついたらスクスクと伸してやり度いと思つて居ます。鉢も九寸の大きなのへ移植しました、処が友人の曰く……この梅は、いつ枯らすのですか……と、呵々……大きくして梅干を作る程に育てるのだと答へましょ。／〇自分では何とも思つて居ないのですが……耳が遠くなつたね……と笑ふので……耳はよく聞へるよ……と言ふと尚笑ふのであります。近頃、注意してみますと「私の耳はイササカ遠い」と言ふ結論に達しましたから、御訪問下さる時は、一寸、高声にお願い申し上げます。しかし、聖言は聞えるから大丈夫。／〇大島の新年は、平常と余りかはりはございません。治療の休日が多い位であります、それでも正

月の祝食を一通りいたゞき（酒はなし）ますと、なんとなく正月気分が出て参ります。妙なものであります……。そして短歌会とか俳句会などにも、常と別の気持ちで賑やかにはづみます。／○故郷を出て満三十年ですが、音信絶えて十余年、むかしの故郷でのお正月が矢張り、なつかしされます。お正月でもお祭りでも、家族制度の有難さが思はれます…家族と共に祝ふ……其処に善いところがある事が痛切に思はれます。父の家の外では、本当の祝ひ心は出ません……日本の習慣はよい！／○今年は建て直しの年ですから、キリスト教の儀式の中へ一層に古来の善い処を取入れて、善い民族生活の様式に神の深く尊い精神を盛りませう。／○支那伝道の火の燃えん事を祈ります。有志の奮起を祈つて止みません！」

#### 会計係「報告欄」『靈交』第243号、1939年2月10日

「一、金参円也、京都、五味菊江様、一、金参円也、大阪、岩本琢美様／一、金貳円也、大阪、森本まさ子様、一、金参円也、京都、福永喜久恵様／一、金四円也、京都、志村卯三郎様、一、金参円也、愛媛、岡田大吉様／一、金五円也、大阪、木戸口栄三郎様、一、金壹円也、高松、植田てる様／一、金貳拾銭也、旭川、竹内常一郎様、一、金五円也、岡山、田中文男様／一、金参拾円也、高松、エリクソン様、一、金拾円也、大阪、佐藤楨雄様／一、金参円拾銭也、丸亀、カーレル様、一、金貳円也、丸亀、鹿角義介様／一、金壹円也、岡山、植山貞一様、一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金拾円也、下関、梅光女学院女子青／年会下級部一同様、一、金貳円也、徳島、船木くに江様／一、金貳円也、千葉、高橋音市様、一、金壹円也、香川、坂本皆之助様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様、一、金壹円也、愛媛、矢内原安昌様／一、金壹円也、愛媛、橘新様、一、金参円也、岡山、松山静様／一、金貳円也、大阪、富永繁蔵様、一、金壹円也、岡山、井上孝様／一、金六拾銭也、岡山、馬淵美子様、一、金六拾銭也、大島、匿名氏様／一、金参円参拾銭也、安中、内田久治様、一、金参円也、静岡、飯野十造様／一、金壹円也、大阪、聖光会様、一、金貳円也、松山、青野兵太郎様／一、金壹円也、高松、高橋七五三様、一、金貳円也、東京、宇津木勢八様／一、金壹円也、高松、玉井友治郎様、一、金壹円也、大阪、本田千蔵様／一、金五円也、神戸、江口直二様、一、金参円也、東京、恵泉女学園様／一、金五

円也／（子供さんのために）／、愛媛、松岡貞蔵様、一、金式円也、香川、永井千代子様  
／一、金式円也、岡山、佐藤邦之助様、一、金参円也、下関、本末秋義様／一、金壺円也、  
大阪、高瀬時助様、一、金壺円也、高松、森川なか子様／右、誌代及御寄附として有難く  
頂きました、厚く御礼申し上げます。会計係／附記＝尚、右の外に穂波に自由使用をゆる  
されました方々が有ります、此処に記しませんが、是又、御厚志を深く感謝いたします。  
編集室より」

#### \* 「編輯後記」 同前

「○皆様には厳しい寒波をくゞり、聖戦の駒を進め、建設の国策の精神をば福音の能力に  
よりて、一段と生命づけて下さる事を信じて疑ひません。斯くてこそ、神と皇室とに応へ  
奉る所以と存じます。今こそ支那大衆は元より、内地の同胞の霊界にも、福音の光りもて  
充し強めねばならぬものがあると存じます。／私共は孤島の病床に喰附きても、「神の栄光」  
の崇められむ事によりて得る勝利と平和とを祈つて止みません。信者は機を得ざるも、救  
はれし生命に充つる火焰を伝へざれば、禍ひでありますから……。／○この年は大島から  
も「集会や礼拝席上の感話」を送らして頂ませう。我が会員にもピンからキリ迄ありま  
すから、暴露戦術式にやりませう。其結果として、皆さんより愛憎をつかされて「何だ靈  
交会だなんテ！」捨てて終へと見棄てらるゝかも知れませんが、それならソレでよいので、  
ありませう。棄てらるべきものは棄てられる事が相方に善い事であると思はれます。／○  
我が会の性質なり、内情なりの為めにも、赤裸々に報告する方が良い事と信じられます。  
たゞ言ひ度い事、記したいものが多くて誌面の狭き為に、半端になりて終ふ事は残念なが  
ら詮ない次第であります。／先づ外形よりも信仰生命の祈りに重点を置いて、「神を崇める」  
ことに致す外はありません。編輯の決心は確定して居ります。／○癩者のために社会の開  
門してゐられるのは、宗教門と文芸門とであります、これは有難いことであると同時に、  
大なる誘惑でも有ります。／やゝもすると、無い物を有る如く見せ度がる故であります。  
／文芸も又、懸賞と名誉とを兼ね得んとの野心一杯に走る故であります。／○真に神の大  
生命に活かさるゝ者の大感謝の熱涙は、一面に於て真に神の前に自身の罪に弱きことを深  
く知つてゐる者であるべきと存じます。／最早や世に何等の希望なく、神に用ひらるゝ限

りに於てのみ、世的に存在する処にのみ、癩者の宗教及文芸が真実性を有するのでありますまいか？／○但し、信仰の神による独自性的なものと、純文芸上の価値に於ては、癩者も博士もかほりなく開門されてゐると信じますが……これら純真性を失うて、世的野心に捕はるゝ事は一種の悲惨である。我らは世的誘惑を後に退けて、只一途に純真性に堀下げて行き度いものであります。／○一月二十四日、早く暖うなつてくれぬと冬は閉口だ、足傷に少しく発熱したと思つたら親指が面白くない、思ひ切つて切断と決定。／○一月二十五日、切断した個処の出血が気になるが、集会に登丘する、歩行の調子が甚だ変である、何だか今にも倒れ相に感じる、幸ひ出血の方は思ひの外にすくなくて済んだが、済まぬのは発熱の烈しさで、相当こたへた。／○鉢の紅梅が咲き初めたが、ほつたからしだ、一月二十六日、発熱は下坂となる。切断した跡は淋しいものだ、建物を崩した屋敷地を見る感がする。／○早く暖かく成りて呉れぬと、冬はマヒした体には苦手である。病勢がつつたから時々「香り線香」をすこし宛たく事に致す考へである。死なぬ内から！と笑ふ友もあるが、生死の問題でなく、訪問者への礼のためである。／○近頃は、原稿を認めると夜が眠れないやうになつた、誰か交代して貰はぬと身体が編輯に耐えなくなり相である。元より暖くなれば、幾分か根気も強まるであらうとは思ふが、考へると島に来てさへ三十年余だ、能く保つものだ！／○直ぐ前の改築が二階建となつたので、太陽がおがめなくなつた、地下室然たりは一寸閉口する。然し、我が居室も近く改造はされるが、矢張り太陽はどうか、何分にも家と家との距離が近過ぎるから致し方がない、土地のないのが、何よりも根本問題なのだから、何んとも致しやうの無い事である。／○電気は出来、水道は出来、大島もかわつたものだ、狸の巣から都会が出たやうなものだ、有難い事だ……さて、残る問題は「心の火」であり、「心の水」である、果して何程輝いて来たか、何程うるほひて居るであらう……。」

#### 会計係「報告欄」『靈交』第244号、1939年3月10日

「一、金五円也、愛媛、安井富士三様、一、金五円六十六銭也、堺市、齊藤敏夫様／一、金六十銭也、盛岡、三浦信一様、一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壹円也、高知、大坪虎意様、一、金壹円五十銭也、高松、大塚雪雄様／一、金壹円也、愛知、齊藤静

子様、一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金五円也、沖縄、三上千代様、一、金六十銭也、北海道、石井六蔵様／右、誌代及御寄附として頂きました、厚く御礼申し上げます。会計係」

**\* 「編輯後記」 同前**

「○冬も今月一杯で北の方へ帰退するであらう、すると我々は大いに暮しよくなると思ふ、もすこしの忍耐である。人生の苦難もこの冬のやうなもので、少しの忍耐によつて又、春に逢へるのであるまいか知ら……。／○いとはしいと思ふ寒波も、実は大なる役割を果して居るのだ、害虫は死ぬ、物の根は強る、土は肥える、益虫の卵は保護されると言ふ、他にも、私の知らない使命を行ふて呉れたであらう……。人生は涙の底にも味がある！／○先日も保育所の大浜先生が見舞に来て下さつて……。足傷も大した事がなく、鉢の紅梅も大したものでなく……。然し、後記の記事は嘘ではありませんね、有る事はありますからね……。と共に大笑ひであつた。／○人生の苦痛も、人生の楽しみも、思へば少さい事ではある、私の如く、年少にして癩に冒されて一生病床につながれたとて、僅に五十年にしか過ぎない、是を天地の悠久に比べて、鉢の紅梅の一輪ほどのことである。／○哄笑しつゝも……。信仰と言ふ事もこれかな……。カクサレた少き真珠であるが、神が永遠の生命として約束されてある処に大なる問題となる。鉢の紅梅も編輯記念木たる処に心がひかる。これは近頃ほんとに面白い話であつた。／○教会家族制度へと言ふ声が注意をひく現在の教会制度は、会衆制であり、長老制であり、民本制である、頭のスゲカエの何時でも出来ると言ふのは、日本人にピッタリとして居ないのである。この論は考へさるゝ……。／○兎に角、信仰者のグループについては、十分に研究する必要がある、何等かの形で「集会を持つ」と言ふ事は必要である。然しグループの制度が神にかわる事は、断じてよろしくない。／○大島では、八宗九宗の各会組織があつて店を並べ、皆何会かに加入して居る、然し同じ会員であつて……。へー彼の人会員であつたのか……。と驚きあきるゝ事がある。そして靈交会にも斯る存在者が出来さうだ、信仰よりも社会的が主になると是だ！／○もし、斯る信仰外に流れるやうでは、靈交会を開散するに限ると思つて居る、社交的ならば、他の名に於て組織するがよい、靈交会は、**キリスト**信者の「礼拝」のグループとして四、五人でも

よい「集会を保つ」て行き度いものである……／○会が神に牽制せらるゝ事は有り得ても、人数に牽制せられたくないものである……信仰上の事でなく……他の不平で退会してやるぞ式の脅迫気振りはサタンである、斯る者は、ドシドシ会より放逐すべきであると信ずる……。／○我らは社交と言ふ事を、いま改めて**キリスト**に習ふべきだと言ふ点も考へざるを得ない。**キリスト**者は余りに「独善」的に高く慢じる傾がある。聖書の**キリスト**は、人間の屑と常に交はられて居り、祭婚葬などの客として、常人の如く飲食せられた。しかし**キリスト**は乱るゝ事なく、必ず席客を潔められたのである。禁酒禁煙よりも活ける信仰の人格が大切である、此処に**キリスト**の社交上の輝きがあられた。信仰より自ら湧かざる事は権威がないのである！／○人は皆、罪人で義人は一人もないと言ふ点に於て平等である。しかし、不信仰と信仰との相違は、永滅へと永生へと越せない淵の相違である。**キリスト**の十字架を信ずるか否かの一件に、福音はかゝりてあるのだ。／○道徳、善行、飲食などでなく……汝、**キリスト**を信ずや否やが大問題なのである……此の一点に於て、信者は世と同行出来ないのである、**キリスト**の十字架か否かに於て、我らは世より迫られ、世より棄てられ、世に入れられない光栄の苦痛に追ひ込めらるゝのである、是が**キリスト**信者の世と合はぬ一点だ！／○然らば道徳問題はと言へば、「聖霊の結ぶ果」が自から信者の生活に備はつて来るものである。何処迄も戦はざるべからざる事は「唯一つ」、これは又、人間の無くてならぬ「唯一つ」のもの、**キリスト**の十字架の救ひである。／○この後記は、気軽に何か書く欄でたのしみの一つであるが、又なにか屁理屈を並べ、是れでサヤウナラに致します……何卒、時候柄風邪が流行してゐますから、皆様の御自愛を祈り上げます。」

\* 「報告欄」『靈交』第 245 号、1939 年 4 月 10 日

「一、金貳円也、京都、伊賀貞子様／一、金壹円也、島根、大東教会様／一、金参円也、岡山、佐藤邦之助様／一、金貳円也、岡山、高戸猷様／一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金六拾錢也、茨城、塚田利生様／一、金壹円也、大島、わたなべ様／一、金六拾錢也、高松、植田マサエ様／一、金貳拾錢也、徳島、齊賀敬彦様／一、金貳拾錢也、東京、小高瀧夫様」

\* 「編輯後記」同前

「復活祭の復活号を差上ます、こんな誌でも編輯させて頂きまして、御復活の証言をいたし得ます「光栄」に思はず目頭が熱くなるのであります。／御救は御復活の中にあります事を、勿体なく体験させて頂くものであります／×／昇天者の記念会には、故友に対して友情を新らしく温め、且つ数々の教訓を受けられます。祖先達への思ひを一層深くして、遺業に起ちあがりて、更に聖戦の駒を進める事も大切と存じます。昇天した人の信仰こそ、最早や大丈夫であります、生ける者は躓くと言ふ事があります、然し、灰の中より立ち上りたい。／×／新築工事に従事する左官屋さんが、黙々と泥をこねてみると、その脚下へ雀がワラを貰ひに来る、長いのをクワへて飛ぶ、左官屋さんがニツコリ笑ふて見送つてゐる。春の陽の味が窓外一杯に満ちあふれてゐます。／×／原稿書くには静かな雨の日もよいものです。ペン執りては、如何なる騒ぎも耳に入らないのです、心はペンを離れ、世を離れて、**キリスト**の聖前に坐して伺つて居ります。故に、後で読んで自分でも吃驚するやうな個所を発見します。／×／心が問題や、ペン先や紙の上にウロツイて居るやうな時は、ホゴのみ出来て原稿になりませず、よし原稿に致しましても不満足を感じが脱けません。穂波と言ふ人間は屑ですな、賜がなければ何一つ出来ない者であります。／×／四月は、患者自治会の総代さん以下の世話人の改選があります。その方の寄合や相談会が多いので一寸多忙になりますので、早く編輯をと祈りましたら、スラスラと二日で出来上りました、有難いことでもあります。／×／最近、求道者が四名か加へられました。詩人あり、歌人ありで、先づインテリ級でせう、誠に喜ばしい事でもあります。理智の上に信仰を加へることは、人格的完成に必要であり、救はれた魂の歌は一層に高く香ると信じます。／おかげで最近、拾円余りお金子が出来たので、「基督教百科大辞典」を求める事が出来たので、大感謝であります。先に求めた「聖書大辞典」と共に、嬉しい座右の友であります。次には記入する余白の多い旧新約聖書を一冊欲しい。そしてミツチリ研究したいと存じて、ウキウキと悦に入つて居ます。／×／足や手やが冬ごとに自由を奪つて行くのには閉口しますが、その代りには目が少しカスム事があるくらひですから、読む方へウンと馬力をかけられます、読むは聖書です。聖書と角力です、ヤコブの如く勝ちたいと思つて居ります。／×／読めなくなつたら？、祈り一つに生きられます。祈れなくなつたら？、祈れなくな

りやうがないのです。地上の祈りが終れば……天国？……へ一足飛して、皆さんサヤウナラと言ふ事になるプログラムらしいですよ。呵々／×／或人が曰く、大島の穂波と言へば、レプラの代名詞のやうだ……云々／余り有難く思はれない、これは迷惑至極であります。／せめて、**キリスト**者の穂波と言つて頂けるやうになりたいと存じます。／×／八紘一宇の新秩序の平和のために祈りつゝ、擱筆いたします。／時は春、福音のため御精進の程を孤島の空より祈り上げてゐます。／御自愛下さいませ、大切な御使命であります。／御復活の**キリスト**の証者なのでございます。サヤウナラ、又五月号にて！」

**\* 「後記」『靈交』第 246 号、1939 年 5 月 10 日**

「○冬が別れを惜みて行つたり戻つたり、時ならぬ降雪があつたりする、所内も風邪が流行して、我れ遅れじとばかりに引込んである、どの室にも三、四人はゴホン、ゴホンとせきしてゐる。／自分は永年風呂に入らずに冷水で拭いてゐるので、今の処、まづ風邪には負けないで編輯が出来て感謝である。／○部屋にのみ引籠つて居ると、大島の出来事さへ知らずに済むものと言ふことを知つた。狭い土地の七百たらずの人の社会に於てさへ、ウツカリすると取り残される……そして取残されて居る人の有る事も知ることが出来た。／○自治会役員改選の結果、石本兄が絶対多数で総代に当選になつた。足痛で引込んで居る自分まで知らぬ間に副議長（室長会及評議員会兼任）と言ふ重任に当選して居る通知があつた。自分の方は大した事もないが、石本兄は向ふ一ケ年は御骨折の事であらう……靈交会員、兄の為に祈るや切！／○改選の度に、我が靈交会員より相当に選出される。今回も六、七名も引張り出された、それは結構なやうなものの、それだけ会務の方や礼拝出席差問者の多くなるのが、何となく淋しい。／○高橋女医先生が青森の方へ御帰りになられるのは、お役所の方に数ない信者だけに余計に淋しい感じがする。元より神を信ずる者には見ざる処に希望をつないで、人間に由つて喜悲しないが、然し、是は人情と言ふものであらう／○信仰と言ひ、或は愛と言ふ事も、ともすると人情の方へ流れ勝ちになる、即ち神よりも人に希望を置き、聖旨よりも欲する親切を要求する、恐ろしい事である。世の人は愛を聖旨の中に観ないで、自己の欲求に対する適否によつて判断するものである。世に誉めらるゝ人は、世の欲求に能く応ずる人である！／○真の信仰は、「神に依りて独立す

る」ことである。聖旨を愛し尊み、神にのみ信頼して生死する事である。信仰による愛は、神の要求する処に基して、其処より発出して他に及ぶ事である。神は必ず、お役所の方へも善き器を起し給ふであらう事を信ずるものである、宗派はいつでもよい、療養所の救のために、職員各位の霊的幸福のために、祈るのみである……。／○日本に於て現在こそ、**キリスト教**の初期であると言ふ声は傾聞に価する。／**キリストのキリスト教**は、現在やうやく日本に於て初つたのかも知れない、他の真似でなく、内より湧き出る**キリスト**の血に彩られた生命でなくては……！／それには、個人々々が神に依りて独立せねばならん、純な信仰に立つて、混合物は絶対に排すべきである。教友は聖旨の内に置いて愛し合ふべきである。／○聖書研究の權威なる天沼兄が大変に衰弱せられたとの事、聖書研究家を起して頂きたいと祈つて居るが、暖になれば、先づ自分が初める事に致し度い。／聖書研究する事は、上よりの祝福である、御導きである楽しい極みである、そして只一人するよりは兄弟達と共に研究する方が一層によい……。／○雑誌をよむ、書物をよむ、読む物を選定せぬと疲労するのみで、益のないツマラヌものが多過ぎる、アラケズリでもよい、肝のあるものを読むべしだ。／文章を書く、詩を作る、それもよいが、真理のつゞれぬものは、是又なんの益もない、単なる文芸にはイササカあきが来たやうだ。掬みても掬みても尽きない味は、矢張り**キリスト**の中にのみある！／○さあ五月号が出来ました、読者諸君の御手許に参ります頃には、春も盛りを過ぎるでありませう、葉桜の朝に時鳥の啼くのも近いでありませう。／皆さまの御健在を祈りつゝ、擱筆いたします。サヤウナラ、又六月号にて……」

**\* 「報告欄」 同前**

「一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金貳円也、愛媛、真鍋フク様／一、金壹円也、広島、中上悟様／右、有難く受納仕りました。」

**会計係「報告欄」『靈交』第247号、1939年6月10日**

「一、金五円也、北海道、能見利治様／一、金貳円也、島根、松原あさ様／一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金壹円也、大島、匿名様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金六拾錢也、岡山、後藤茂一様／一、金壹円也、岡山、林麟三様／一、金貳円也、香川、

山下彰様／右、誌代及御寄附として頂きました。会計係」

**\* 「編輯後記」 同前**

「新聞やラジオやの放送が出駄羅目やおざなりでないならば、大島に居つても井の中の蛙とはならない筈の時世だがなア……。／社会や、時勢に対して、幫間的な芸当を行ふ者が尠くないのは、うるさいものだ。ホントのことを言へ、ホントのことを書いてくれ。／潮と言ふものには、たいていウワ流れと底流れと、違つたものが有るものだ。総動員するには奥底より搦んでやつて、救ひつゝ導くことが大切だ。／軽々しくへいへい言ふ奴は、軽々しく呟き出す奴だ……。深く考へて立ち上る者こそ、最後までも頑張る者である。**キリスト**者は後の部類に属する。／祈りの総動員である「東亜永遠の平和」の建設のために祈る祈る……。／支那へ伝道のために神に献身して出かける人のために祈る祈る……。／私も病軀大分疲かれて来た、一度静かに聖書に向ひて改めて反省し、一切を清算して置かねばならぬと思ひます……。／他人に神を語つて自ら救ひより落ちては、大変でありますから。誰か交代して叫んでくれないかなア。されど神よ、聖心のまゝに導き給へであります。／患者自治会の予算表を見て、我々の生活も程度が高くなつたものだとツクツク思ふ。これだけ苦勞も多くなり、貧富の差も大きくなつた事を思ふ。／今日の療養所は、百万長者も極貧の者も集つて同室する、其処には最底報酬の作業者や互助金を受くる者は、おつつかない事になる心配がある。／それよりも何の作業も出来ず、互助金も貰へない程度に居る自分の如き中間の者は、一層に苦しくなるやうだ。これは我らの考へねばならぬ社会問題である。／結局は、永遠の世界での報ひを望みて、地上生活を簡易より簡易化して行くべきである。即ち美食して不平言ふよりも、水を飲みて感謝するはよろしき哉！／信仰だ、信仰だ、神恵の美に酔ひ、永生の美をまどふ喜悅こそ尊いのだ。／でないと人生地上の希望を失へる癩者が食ふ着る楽しみより脱する事は難い哉だ。／刹那の誤樂に走ることは、壮健者が富と位とを一丸にしたものを以て招かれた時とヒトシイ程である。あわれと言ふも、中々おろかなり……。あなかしこ／青葉の自然はよい、社会とか人生とかを思ふ心を棄て、初夏のフトコロに入ると何と清々する事か、神への祈りが自から湧き溢れて来る。／人の関係に捕へられて「詩想」が枯れて居ます。自然と神とに沈み切つて、心ゆくまで詩

つて見たいと思はれます、私も十字架の上にをかれて居る？／では……これで六月号は生れます。何卒、御叱訓下さいませ。／勇しく各位の御活躍を祈上ます。ごきげんよろしく……サヤウナラ／（(全完)）」

#### 会計係「報告欄」『靈交』第248号、1939年7月10日

「一、金六拾錢也、広島、平山千代子様／一、金六拾錢也、鳥取、遠藤泰子様／一、金六拾錢也、神戸、山口行之進様／一、金四拾錢也、長野、青柳藤助様／一、金五円也、青森、高橋竹代様／一、金壹円貳拾錢也、北海道、山口仁太郎様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金貳円也、平塚、高橋住子様／一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金壹円也、帯広、木末登様／一、金壹円也、広島、東山磯男様／右、誌代及御寄附として頂きました。会計係」

#### \*「編輯後記」同前

「療養所の医官が応召して戦死した事が大御母の御耳に達して、有難き極みの御下賜の噂を拝承、今にして知る御仁慈ならねども、感激の涙あらた……！／女医高橋竹代先生が青森へ御栄転になられた。七年間の愛の御尽力に於ても、又、同信者として御指導に於ても、一方ならぬ感謝である、先生の御幸福を祈る／支那事変は祖国にとりて一大転機となつたやうだ、其処に当然来るべきものは国家制度の改革であらう、統制強化も止むを得ない事であらう……。／孤鳥病窓の我らは国家の動きにうとく、大局を察し得ずして、旧態に眠り易い、これではならない、十分目を醒して、国家の新体制に順応した精神が必要だ。／つまらぬ不平をこぼして居る内に時代はズンズン進んで行く、新しい力は療養所の上にも伸びて来る、否、既に我らも其力に連歩して居るのである。／兎に角く、如何る体制下にも、人間として必要なのは「キリストの救」である。神による生命をもつて国家へ御奉公もうす事が大切である。／アマリリスの花が咲いた、白百合も香りはじめた。看護婦さんより頂いたスイトピーが机の上に匂ふ、聖書と花の香とはアクことがない……。／靈交誌は読者より大変愛せられて感謝である。しかし、矢駄羅に人に愛せらる事は考へものである……。靈交誌よ、世にコビてはならないぞ……。／随筆を止して、病床夜話を続稿する事にした、これは実際に語り合ふたものを要約したもの、こんな話を静かにして居ると、時

間も何も忘れて終ふ……。／天沼兄を失ったので、聖書研究の權威を無くした淋しさがある。噫天沼兄逝くは、葬別の式場での感話した要旨。近頃は沢山に永眠する、我も又近いか！／大島から出征されてゐる宗内先生は、我らが先生のために祈る以上に我らのために祈て下さつてゐる、永眠者の事について心尽しの御便りなど……。感涙／支那と救ひ、種々に考へさゝれ、祈らざるを得ない。英米の永年の伝道の苦心には何か不足があつたのか、否、草分けの仕事はムツカシかつたであらう。／これからは日本人が靈界に乗出して汗を流すのだが、己を棄てキリストの十字架を負ふことを、神は要求なさつてゐたまふやうに思はれる。祈るや切！／何もかも値あがり、其上に品不足らの事で当局の方の苦心なかなか、しかも苦心の跡があらはれ難い御気の毒。時局柄御互に不自由生活は忍ぶ外はない。／聖言の餓飢は国の滅亡する兆であるが、物質の不足で国は亡びない。いまの日本は無くして不自由でなく、有るがシマツテゆく。のだから大丈夫である。／学問もないが、深い思想も無いが、病苦の重荷の下で追ひ詰められし靈が実際に恵まるゝ生命の信仰一つの証しである。七月号も同じ一でどうやら済み。／五月雨のユウウツな日を聖書に親しみつゝ、何もかも忘れて暮します。別に他に求めるものもなく、楽しむ事もなく過ぎた三十年の如く、これは恵です！／ものが書けなくなるとも読む目がある……。読む目がなくなるとも祈ることが出来る……。祈ることは永久になくなる心配はない……。祈りは奉仕である！／思はれる、欲する、等々でなくハツキリと神の所有に成り切つて居ないと、病勢増進のため意外の失敗を嘯まねばならないぞ、アラオでなくアルこれだ。／各位の御精進を祈り上げます。何卒、私共のため御祈りと御叱訓とを願ひ上げます。本誌が御手許に届く頃は、暑くありませう、御自愛下さいませ。サヤウナラ／（(全完)）」

#### 会計係「報告欄」『靈交』第249号、1939年8月10日

「一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金貳円也、東京、田中儀三郎様／一、金壹円也、大阪、聖光会様／一、金四円参拾錢也、近江、八幡エスエス様／一、金壹円也、新居浜、橘新様／一、金貳円也、兵庫、名和金次郎様／一、金六拾錢也、岡山、三島甫様／一、金六拾錢也、香川、上本隆重様／一、金貳円也、福知山、足立和江様／右は、誌代及寄附として頂きました。会計係」

**\* 「編輯後記」 同前**

「七月七日の記念日は祈る事、感謝する事が多くあつた。結局は、日本に生まれさして頂いたことの感謝と、日支親善により確立する東亜平和の一日も早からんことであると申せます。深く時局と皇国の使命を冥想いたしました。／祖国亡びて妙法何するものぞ……何だか妙にひびきますが、宗教が余りにも理想論に捕はれて、我が住む里の幸福さへもたらず現実力なしとすれば、ウドの大木とひとしい、寧ろ悲哀と申さねばなりません。大いに考へさゝれます。／高橋昭道先生御来島、修養団支部の生みと育ての親とて、感慨無量でした。／この日は実に意外にもトーキーを作る機械を初めて見物し、然も穂波を入れるのだとの事に面喰つて終つた、近頃珍らしく恐縮と困惑とを感じました。／恐縮は「穂波でなければ」との言と、困難は歓迎の辞が述べられず、他の事を言はねばならぬ……心にそぐはない……感じを訂正することでした。兎に角、修養団七巻の内に自分も這入りました、どんな姿か声か珍品でありませう。／その夜、既製二巻の上映を拝見、処が、蓮沼先生と平沼主相と伊独満の大使と、恐れ多いが〇〇の宮殿下御一方、其他は単独映写されて居ませんので屹驚して……穂波、汝何者なれば、斯る尊き人々の間に交り得るやと自責でした。／映写時間は一寸でありましたので、自分も挨拶の一句ぐらひで済むであらう、それなら失礼にならぬ言句も有つたであらうと其点は大いに安心いたしました。皇太后陛下の御歌朗詠も一同で入れて頂きました。／救癩問題が社会の耳目たる新聞雑誌に取上げられ出したのは、祖国浄化のため嬉しい事に存じます。穂波へも執筆の要求があります、その場合は信仰問題など持出さないで、一般の立場より話すことに致して居ります。／近頃、インテリ階級の中に「癩恐怖病」と言ふのが流行しかけて居るとの噂ですが、癩は伝染だと申ましても、人間の体内には殺菌力が相当に備へて下すつて有りますから、それと癩菌は弱いので、御自分の体力を強くすれば！／信仰のない人は、自分の智慧に殺されなされるのですね、インテリさん！／大森先生の曰く「看護婦諸君十分注意なさい、レプラ菌を消毒嚴重に」或日、先生常着のまゝ病室に来られて曰く「僕には伝染しない」偉大な自信です。／「先生、なほりませうか？」、すると「俺の診察と投薬とを信じなさい」、その上に重ねて問ふと「なほして上げると言つたらナオシて上げる」と叱りつけられたものです。

精神医学は大なる力が加はるものでせう……！／極端より極端へ行くインテリなんて、人一倍理屈はこねるが薄志弱行の者が多いんですね——理外の理——神の能力など知らないのですね。／もすこしシツカリ人生を歩み得るやうと御伝声下さいませ……呵々／お暑くなりました、皆さまは、神の国の為にも、皇国の為にも、御大切なお体でありますれば、何卒御自愛下さいませ。今年は雨がすくないので、田植に一方ならぬ、お骨折りでしたのでせう、出征兵士の御家族の為に入祈上げます。／暑中御見舞申上げます／靈交会一同／各位様／毎月の編輯も中々の骨であります、身体の弱さと無力さを相濟まなく存じて居ります。何卒、御導きと御祈添えとを御願ひ申上げます。／お粗末な八月号なれど御目にかけます、では皆様……サヤウナラ！／（全完）」

#### 会計係「報告欄」『靈交』第250号、1939年9月10日

「一、金参円也、大阪、岡本謙三様、一、金六拾銭也、若松、小林マスエ様／一、金壹円也、京都、大塚清明様、一、金拾五円也、倉敷、林源十郎様／一、金貳円也、小倉、樋口光義様、一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金参円参拾参銭也、カナダ、鷗本正信様／右、感謝いたします。会計係」

#### \*「編輯後記」同前

「▽から梅雨の後をうけて立秋の今日まで雨を見ない、否一度夕立があつた、大島全土に対してバケツに四杯ほどバラバラと降つたきりです。カンカンと勇ましく早りつゞけてあります。『我れ夏を愛す』であります。／▽汗とよだれを牛の如く流しつゞも、元気でやつて居ります。野牛の性と見えて甚だ強情であります、九十何度と言ふ日には流石の牛性も食事を休むやうな事もあります、決して屁古垂れは致しません、御安心下さいませ。／▽大島は気候は平均して好調であると申すべきであります、病体は体そのものに既に異変があるので、今日でも綿入を看て蚊帳の中で風が寒むいと言ふ、その隣台には赤裸で水枕、濡手ぬぐひを当て、身が燃えてと申し居る大島は一室の中でも寒熱甚だ不順である事も間違ひない話でござります。／▽反英運動のこゑを耳に致します、日本人よ、神に帰つて強く立て！／正義の道ならば、相手の悪口いひつゞ騒ぐ必要はないでないか？／腹で押せ腹で、顔は微笑して腹でウンと押せ……！／▽恵まるゝ儘に記く「残暑」は御判読下さ

い、何か記し足らぬハガユサを感じてみます。一寸と出足が遅れましたかな、盗人を捕へて縄をなふ感がしますが……それと注意せんとサタンに逆術をとらるゝ恐れがあります。

／▽病床夜話は、ヨキサマリヤ人を自分が盗難の立場に立つて考へて見ました／何分にも椽の端や、お茶のみながらの雑談まじりですから、後日一考して見たいとも思つてみます。

たゞ現身の上に取りて深く思ふのであります。／▽詩は即吟であります。打越兄の純な証言を尊く存じます。／三宅老兄が手の痛みにより、原稿の頂けなかつた事を残念に存じます。／病者として毎月記くのは骨であります、会員が一段位書かれるとよいに／▽観音竹と言ふ鉢植を高本兄より頂いた、私は鉢植や小鳥を世話するのが下手で、よく枯らすから「この鉢植は何時からしますか」と笑はれるのであります。何か読んだり書いたりすると、ツイ他の事は忘れて終ふからでせう！／▽近頃は、講壇用の聖書を読みつゞけて居ります。これは視力の都合が一寸いけなくなつたらしいのですが、日によりますと五号活字を少しく読んでも大丈夫なので、決して心配いたして居りません。／▽心配するので祈ります、凡て神によりて受くる時は栄光と化します。もし神の業とならねば、なるまで待ちます、神の業となる迄祈りぬきます。／信仰とは、神に対して絶対の心です、即ち栄光か死かの境地に立つ事です。／▽朝顔のコボレ種を踏まれないやうに庭先に保護しました処、いまでは何もかも巻き倒して荒れ咲きに誇つて居ります。心臓の強さ穂波の如しなど思はれて、少しくツミ取つてやりました、是は私によいことと考へて居ます。／▽変化のない生活とて、別に珍しい話ありません。それでも「後記」に達すると、これから私の欄だと言ふ気が致します。この気持は嬉しい疲労であります。八月号が今日刷れて来ました、近く御手許に差出されませう。／▽お恵みにお恵みを重ねまして、二百五拾号になりました……一風かわつた記事の雑誌と言はれ、チリ紙に印刷したものと評されました。お金子は十分に頂くのですが、会計が他の奉仕へまわされて終います……これで満足です。／▽病者の生活が宗教と文学とのみでなく、何か発明の方へ伸び上れないものかと思考いたしますので、奨励の道を開いて見たいと祈つて居ります。彼の「亀の子たわし」の事など大いに学ぶべきだと存じて居ます。／▽生命の為に如何なる処、如何なる事の中に、神は光りを蔵されてあるかも計られません。神を信じて恵を望みます。／残暑の折

柄、御自愛下さいませ！サヨナラ」

### 会計係「報告欄」『靈交』第251号、1939年10月10日

「一、金四円也、愛媛、平尾権之助様、一、金九円也、今治、地の塩会様／一、金壹円也、高松、玉井友治郎様、一、金壹円也、名古屋、松原和人様／一、金六拾錢也、天塩、石井六蔵様、一、金貳円也、京都、伊賀貞子様／一、金壹円也、大阪、辻政子様、一、金壹円也、広島、中上悟様／右、誌代及御寄附頂きました。会計係」

#### \*「編輯後記」同前

「今日は九月十二日である。ヤツト編輯を終つた、なつやせの骨と皮の体を撫しつゝ毎日二、三段づゝ記して来たが、仕事のあるのは幸ひが又楽しいものだ、遊んでウンザリするのと働いてウンザリするのは気持ちに大変な違ひがある／物価の高くなつたのと統制で原料が来ないので、患者自治会の購買製造部が悲鳴をあげて居る、こんな際は錢に値ひがすくないから使はぬに限るのだが、何時迄つゞくか知れないので困る。然し、時局を想へば止むを得ない事だ。／働く者はホクホクであるが、一定の月給ぐらしと中産階級者と予算で行く所とは一寸コタへるであらう……こんな事を言ふて居れるのは兵隊さんの御蔭です。もし戦争に負けでもしたら、ソレコソどんな目に会ふであらう……。／実に支那の人々に同情する。兵火の跡に自宅を掘り起す時の心は如何であらうか……何としても東亜の永遠の平和を今度こそ確立して欲しい。日支の親善を作る事が最後の重大工作である。支那人を愛する事である……祈る！／戦争の後へ乗込む日本人の人格が下劣で、心ある支那人は兵火以上に禍視して居るとの噂があるが、困つたものである。将兵の流血で清めし後を汚す奴は日本人の面よごしだ、追ひ払つてしまふ事である……修養が必要だなア！／久しぶりの雨で嬉しかった、これで残暑が柔らぐであらう……暑い内は可成食事がとれたが、涼しくなるとスツカリ食慾が減退する……君はマルデ皆と反対だなア、君にして初めて「我れ夏を愛す」に徹底してみると評笑される。／簡易生活の必要を感じたのは、移室に際してでありました。平常から単純な生活を心掛けて居たのでありますが、アカのたまる如く三十年の内にたまつてコウルサイ物が沢山あるのに驚き、人一人の生活は容易でないと思ひました。／秋は収穫の時であります、各位の御働きの上に神の栄光の盛上げられますやう

祈ります、それと同時に流行病の活躍する折柄でありますれば、神のため、皇国のため、御大切な御体のこと、一入の御自愛の程を願ひ上げます。／第一線の戦地の方より、御慰めや奨励の御手紙や絵はがきやを頂きますので、恐縮のしつゞけであります。〇〇方面の兵隊さん達の多くが穂波の名を知つて居られるとの御便には、意外のことに呆然となる程に驚かされました。／石叫ぶべし……との神言は確証されて居ます、石コロか塵埃りの私を用ひ給ふ神の聖業を、今更ながら驚き信じます、神恩、国恩のため、将兵各位にならつて死者狂ひで残されし使命に走りつゞけ度いと存じます。／何とぞ此の孤島に病み臥す土の器のため、御祈り添への程をお願い申し上げます、癩を發して三十八年、信仰に入りて二十五年、最初の詩集を出版して十二年、靈交誌にペン執りて二十一年、感慨無量であります、神恵、国恵、人恵の賜です！／乙竹先生が私に三樂園と言ふ庵号を下さいまして十年になります、ほんとうに三樂園主人になつて居る訳でした。神の恵を楽しみ、国の恵を楽しみ、人の愛を楽しむ私であります。こゝにペンの力、生きる力があります。／皆さまの御幸福を祈りつゞ、擱筆いたします。サヤウナラ／（全完）」

#### 会計係「報告欄」『靈交』第252号、1939年11月10日

「一、金壹円五拾錢也、北海道、山野井ルノ様、一、金貳円也、香川、山下彰様／一、金六拾錢也、京都、杉山勘一様、一、金壹円也、広島、中上悟様／右、誌代及御寄附を頂きました。／尚ほ、一期間の総会計表は都合によりまして、来月号にのせ度いと存じます。／（会計係）」

#### \*「編輯後記」同前

「秋雨の晴れた朝である、蒼深な空を仰いでみると、居宅の裏の大きな柿の樹に枝もタワワに熟してゐる柿の実と、其梢にキリキリと鳴く百舌鳥と地上二、三間の処をスイスイと飛んでゐる、吉野河邊の故郷の幻が浮び出てくる。／貧乏に喘いでゐた農村であるし、青年から見捨てられた水村ではあるで、何歳になつても故郷は恋しいものだ。編輯と言ふより原稿に疲れた私は、今朝は一入に秋らしい情調にひたらされる……噫お母さんは生きてみられるか……！／長田穂波と言ふ名によれる記事が社会に顛れだすと、肉親の者は皆音信不通になつて終つた。十余年の間と言ふものはハガキ一枚も受取らない、俺も人間だ、

人一倍感じ易い神経だ、淋しい淋しい想ひがする……。／福音のため、キリストへの愛と感激のために、使命に立つて負はねばならぬ十字架……。決して安いものではない……。二十五年の回顧は此の弱い性質の私にとりて不思議な勝利である、弱きに於て頂く御恵の外ではない。／神へ智慧も力も捧げ尽して来たが、私は決して聖人でも君子でもない、大ボンクラである私にもすこし偉い処があれば、とうに信仰など棄てゝ居たであらう……。ボンクラなるが故に救はれて恵みの中に活かされて来たのである！／悲しい事は悲しい、苦しい時は苦しい、損と徳とのケジメも考へられるし、他人の欲しい物は私も欲しいと思ふ、斯る事に私は不具でない……。然し、凡てについて神よ、聖心のまゝに……。と祈つて全任しきつて来たのである。／神に全任しきつたと言つても自分の力ではない、さう為るより外に善き術なき弱い者であるから、神がさうさせて下さつたのである、その証拠には私は自分の智と力とで出来ない事が二十五年の間に余り沢山できてゐるから！／欧州の空に砲声が起つた、防共も何もケロリとして「物を得る」こと以上の事は何もない動物共がソビエトを檜舞台へ引上げて来た。猫の目の如くかわる外交だ……。有為転変とは彼らの心理を言ふべきであるまいか……。？／日本には武士は食はねど高揚子と言ひ、渴しても盗泉の水を飲まずと言ふ事がある、斯の道徳を失つたならば、何を以て「神国」と言へやうか？／物の国は増して来るが、神の国は追々と減じて行きつゝある。そして其の悲しき先達を指して英勇と崇める、こゝに現代の世相があるのであるまいか。／秋雨が降ると木の子が出るもの、大島の山にもマツタケ、シメヂ、クロコハツタケ、ズルタケ等々が沢山でたものだが、人が多くなつて余り生へなくなつた、山が荒れたのであらう、キヒメジの味は今に忘れられない。／今年は疲労が甚しいので、陽が暮ると眠るのが一番よいので、月見をせないうですんだ、独り静かに月を仰いでゐると何もかも清澄しきつて行く感じがするものである。そんな時に若し尺八の遠音でもあると、何とも言へぬ感がする。／サア、十一月記念号も編輯済みとなつた、第一線の将兵及戦傷病兵の御武運を祈り、戦死者のために祈りつゝ、擱筆いたします。／銃後の皆様も一方ならぬ御苦勞と存じます……。これで東洋水遠の平和が築けなかつたら……。それこそ大事です、神への祈りを一層深めませう……。／殊にキリスト者の御精進を切に祈上げて居ります、福音の最も必要な時！」

**会計係「報告欄」『豊交』第253号、1939年12月10日**

「一、金参円也、大阪、北村寿四郎様／一、金六拾銭也、東京、安部幸教様／一、金壹円也、東京、松本タマ様／一、金壹円也、朝鮮、中山マツ様／一、金壹円也、滋賀、塚田利生様／一、金六拾銭也、愛媛、松岡貞蔵様／一、金壹円也、門司、鶴原智恵様／一、金六拾銭也、愛媛、十河キヨ様／一、金六拾銭也、愛媛、荒井スミエ様／右、誌代及御寄附として頂きました、感謝いたします。／会計係」

**\* 「編輯後記」 同前**

「□今日は十一月三日「明治節」である、この佳日は私に親み深いもので、今でも天長節と言へば十一月三日と直に頭に来る。明治生れでありますからね！／貧乏村の小学校時代がなつかしい、鼻汁を袖口で横撫でしつゝ、「今日の佳き日は大君の生れ給ひし佳き日なり」と歌ひ祝して、学校から紅白の餅を貰つて大喜びで家に帰つたものであつた。学校に縁のあるのは小学校だけである。／□一寸考へると時局がらクリスマスが不釣合に思はれるが、ヨクヨク考へると斯る年にこそ平和の祈の鐘を高く鳴らすべきである。／事変の目的は「永遠の平和」にあるのだ、日本も支那も、その招来を衷心より求めて居るのである。サタンよ退け、我らは平和の主を迎へねばならんのだ。／□秋空は菊日和に澄み渡つてゐる、海岸に立つと遠くの山が見える……旅行がしたいなア……と言ふ心が起きて来る、行けたら彼の人を訪ひ、此の教会もたずねたい、それからそれへと空想の旅がつづいてゆく……。／□夜空を仰いでみると、ヒエビエと肌寒い、近く見ゆる星に、キリスト降誕の物語が胸を占領する、それがゲツセマネの園の祈のイエスに迄も育つて来る、祈りぬいて、またクリスマスの夜に想は返つて、もいちど子供に返りたいと思ふたり、サンタクロスの爺さんの来る方角の天が開け相に思ふたりする。／□こゝろ一月はクリスマスの用意で多忙きはまる、大島の祝会は十二月の十五、六日頃で、毎年クリスマスのさきがけであると言はれる。日曜学校の校長ですから大したものだ、ムツカシイお話ばかりして、無愛想な校長先生である。／私は教育者としての自信はないが、誰も宗教々育をやらんからやつてみます。／□感受性の強い子供よりは、すこし鈍なぐらひの子供の方が腹が出来るやうだ、形式的には駄目だが、イザとなると教へられた真理を真直に突出して進む、上手もないが下手に

迷ひもせない、彼は信仰が智慧を光らして行くから善い、腹へ落ちて行く福音を見ると、私は形式的にツメコム気になれません！／□足が痛むことが多いので、丘の礼拝堂へ登りにくい、又あまり外出したくない、近頃は終日一步も外出せない日が尠くなくなつたので、此間より一日に一時間だけ太陽にあたり、近い処へ出て行く事を心がけてゐます。／□是非とも人類の中より一恐怖すべきサタンの子なる癩菌を、一日も早く根絶いたし度きものであります……先づ日本よりだけでも根絶いたしたく存じます。療養所の中に於て視る処、如何に多くの人が全身のみか全霊までも倒されつゝある事でありませう……言語に余る悲惨の極みであります。／□毎日大争闘であります。こゝもと平和どころか「剣なんぢの心を突き貫ぬくべし」であります。穂波の肉を神とサタンとの一大争奪戦が行はれてゐます。否、穂波のみでない凡ての肉体が一大争奪の修羅場なのでせう……！／□キリストに占領されて初めて勝利と平和とが得られます……しかし肉に於ては、既に全く得たりと申すのでありません、得つゝ有るのであります。日ごとに勝利と平和との色が濃くなりつゝあると申し上げねばなりません。／□私の現在机を置かして貰つて居ます部屋は終日……蚊が出て居ます……諸道具の間から出て来ます。彼が既に寒さの前に、命旦夕に迫りつゝも、最後の一力までも来年の生命を得るために尽すのを思ふと教へられます。／人にして永遠の生命を思はざる者は蚊に劣るなり……など考へます！／蚊は人間の血を吸ふと長い寒波に耐えて二年の寿を保つと申します。／□大島神社が建つので、奉仕作業が初まりました。祖先を敬する事は日本人の美德であります。これは宗教ではありません、国民道徳の一つであります。日本の国体に此の道徳ある限り、共産主義の這入る事はゆるされません。／□クリスト者が伊勢神宮に詣るのは決してトガムべきではありません、偶像崇拜ではありません、祖先を尊敬する国民性の発露であります。天皇をたふとぶ念とひとしいのであります。これは外国と相違する処であります。／□これで性急ながら、クリスマス号が生まれました。時局柄つゝましく、益々靈的に家庭のクリスマス祝賀こそそのぞましい事と存じます。／皆さまの御幸福と世界平和とを祈りつゝ、サヤウナラを致します。／昭和十四年十一月三日（全巻）」